

世界に羽ばたけ！ 米山学友^⑭

二胡で伝える慈しみの心

今年2月、日本画家の巨匠・平山郁夫氏の「お別れの会」が開かれました。全国から駆けつけた人々が献花する間、会場には哀愁を帯びた二胡の音色が響いていました。演奏していたのは、米山学友の姜暎艶さん。広島を拠点に全国で活躍する二胡奏者です。2006年、平山郁夫美術館の特別記念展「仏の来たシルクロード」での演奏をきっかけに、平山氏とは家族ぐるみの親交がありました。絵と音楽、表現の方法は違えども、彼女は平山氏と同じく「平和」を生涯のテーマとして活動をしています。

医師として 生死と向き合う日々

1965年生まれ。中国文化大革命の混乱の中で5歳になった姜さんは、「芸は身を助ける」という父の勧めに従って芸術学校に進み、二胡の英才教育を受けました。みるみる頭角を現し、学校でも評判に。生来負けず嫌いな彼女は学業も頑張り、成績はいつもトップクラス。高校時代には市から優秀な生徒として表彰を受けるほどでした。

音楽と華やかな舞台が大好きだった姜さんは、音楽大学に進み、女優になる夢を抱いていました。ところが、書類の手違いから音楽大学を受験できず、父の指示で医学の道へと進むことになったのです。

思いがけない進路変更に戸惑いを隠せなかった姜さんですが、遼寧省の大学病院で心臓内科の医師になると、人の生死に直面する仕事にやりがいを感じるようになりました。より多くの命を助けるため、優れた臨床技術を学びたいと日本留学を決意。1997年、広島大学医学部の客員研究員として、1年間の期限付きで来日しました。

日本での暮らしが始まって

ある日、犬を連れた老人が飼い犬のふんを拾う姿を目

撃しました。「信じられない！ どうして？」と思いましたが、その後、他人や環境に配慮するためのマナーだと知り、姜さんは衝撃を受けました。

また、研究の合間を縫って市民ボランティアによる日本語教室を訪れた姜さん。「どうせ無料だから」と期待せずに参加したところ、講師陣の熱意、授業内容の質の高さに驚かされました。ほかに、広島で行われるさまざまな平和活動に触れ、市民の平和への強い思いも感じるようになりました。「日本人は優しい。日本っていい

なあ」。日本人は戦争好きで残虐、金がすべての資本主義者——。来日前に抱いていたイメージは崩れ去り、日本が大好きになっていました。

その後、指導教官の勧めで博士課程へ進学したものの、好きなリンゴすら買えない生活苦と、言葉の壁による孤独感が姜さんを追い詰めていきました。簡単な実験がうまくいかず、先生がかんで含めるように教えてくれることも、

まるで子ども扱いされているようで惨めでした。眠れぬ夜が増え、やがてうつ病と診断され、大量の薬を飲み、泣いてばかりの毎日を過ごしました。

苦悩の中で出合ったもの

そんなある日、近くのお寺を訪ねました。手を合わせながら仏像を見つめていると、仏様が今の苦悩をわかってくれているように感じました。そして気がつくと、大粒の涙をこぼしながら、誰にも言えなかった苦しみを語っていました。「私は一人じゃない、仏様が一緒にいる」。これが、仏教との出会いとなりました。

米山記念奨学生に合格したのは博士課程3年生のとき。世話クラブの広島西南ロータリークラブでは姜さんをリンゴ狩りに誘うなど温かく迎え、カウンセラーも実



命の尊さを訴える講演会で、二胡を演奏する姜暎艶さん

心臓内科の医師として日々、死と向き合い、さらなる医学の勉強のために来日した米山学友、^{ジャンシャオイエン}姜暁艶さん。留学生活の孤独感からうつ病になり、絶望のふちにいた彼女を救ったのは、仏教の教え、そしてロータリーとの出会いでした。今、「人生が変わった」という日本で、人々の心を癒やす二胡（中国の弦楽器）の音色を響かせています。



よねやまだより

の娘のように接しました。姜さんは「皆さんの温かさが私の苦痛を取り除いてくれた」と、振り返ります。

日本企業にかかわる仕事をしていた姜さんの父は、以前、「日本人の仕事は細かすぎて心が狭い」と、こぼしていました。しかし、仕事で来日した際、姜さんの勧めで会員と交流、会社見学をするなど日本のビジネスを垣間見たことで、「印象が変わった。仕事に対する厳しさが理解できた」と言ってくれたこともうれしい思い出です。

また、「二胡が弾ける」という話が口コミで広まり、再び楽器を手にする機会が多くなっていた姜さん。最初は「中国文化に親しんでもらいたい」という気持ちにすぎませんでしたが、次第にそれは変わっていきました。

心に響く二胡の音

2002年、医学博士号を取得して博士課程を修了したものの、日本の医師免許がないため、臨床の仕事はできません。「苦しいときに自分を救ってくれた仏教と、中国で学んだ音楽、そして医学での経験を生かして社会に恩返しをしたい」と考えた姜さんは、広島市に二胡音楽院を設立。彼女自身は病院のほか、高齢者や精神障害者、原爆被害者の施設を訪ね歩くようになりました。

04年にはニューヨークでの広島原爆記念式典で追悼演奏を行ったほか、地震で被災した新潟や中国・四川省など、心を痛め、苦しむ人がいる所に足を運んで命の尊さを語り、二胡の音色で人々の心を癒やしています。

プロフィール

ジャン シャオイエン
姜 暁艶 さん

(2000 - 02 / 広島西南 R C) 中国・遼寧省大連市出身。広島大学医学部客員研究員として来日し、医学博士号を取得。命の尊さと平和をテーマにした二胡演奏と仏教講話で活躍している。二胡音楽院院長、日本二胡学会理事、広島大学医学部客員研究員、遼寧中医大学附属日本医薬学院（東京）講師。



「聴く人の苦しみ流れ出るような、そんな音を奏でたい」。時に楽しく、時に悲しげに。演奏を聴いた、ある末期がん患者は「死ぬことばかり考えていたが、残りわずかな時間を生きる勇気をもらえた」と語りました。

姜さんは感謝を込めて言います。「日本に来て私の人生は変わりました。これからも命の尊さと平和を訴える活動をしていきたい。日本のロータリアンは私にとって心の両親。呼ばれたらどこへでも飛んで行きます」と。

ロータリー米山記念奨学会事務局

米山記念奨学事業に関するお問い合わせ・ご意見、または「よねやまだより」についてのご意見は、(財)ロータリー米山記念奨学会まで、ぜひお寄せください。

TEL: 03-3434-8681 FAX: 03-3578-8281

Eメール: mail@rotary-yoneyama.or.jp

台湾の米山学友が「総統科学賞」を受賞



総統からトロフィーを受ける廖さん(右)

日本の食卓ではおなじみのエビ、ブラックタイガー。その養殖に世界で初めて成功し、台湾で「エビ養殖の父」と呼ばれているのが、米山学友の^{リョウウイッキョウ}廖一久さん（1965 - 68年 / 田原 R C）です。日本留学中は、愛知県渥美半島（当時）の東京大学水産実験所で6年間を過ごし、博士号を取得して帰国。数々の水産養殖技術の確立に成功し、世界の養殖業に多大な影響を与えました。今や世界的に高名な水産学者であり、昨年12月には、台湾で最も権威ある「総統科学賞」を受賞。廖さんは受賞にあたり、「台湾も日本もまだ大変な時代に、米山記念奨学金のおかげで、寝食を忘れるほど研究に没頭できました」と、日本のロータリアンへの感謝の言葉を寄せています。